かすかべ
特産品の魅力
再発見!

一 桐たんす

岩﨑 洋さん

春日部桐たんす組合の岩﨑桐タンス二代目。かんな掛け、塗装、金具付けなどの出荷前の最終仕上げと、古くなった桐たんすの再生修理(削り直し&補強)を請け負っている。

日本人の生活が洋式化したことで桐たんすの需要は減ってきていると言われますが、用途を広げれば生き延びる可能性は十分残されていると思うんです。たとえば最近では、革靴やバッグを保管するためのクローゼットを桐でつくるといった新たな動きも業界内には見られます。桐素材は湿気を寄せつけずカビの発生を防いでくれるだけでなく、削り直せば何度でも再生可能なので環境にも優しい。おまけに桐は成長が早くて20年で素材として使えるようになる。こんな素晴らしい素材は他にはありませんよ。(談)

二 桐箱

山田 隆夫さん

春日部桐箱工業協同組合の(株)山田桐箱製作所二代目。現在は贈答用のメロンや漆器等の箱のほか、貴金属や神社のお守りを入れる箱などを中心に製作している。

桐箱づくりで一番難しいのが材料の使い方。箱に使う桐材は、基本的に小さな正目板を何枚かはぎ合わせて作っていきますが、いかに木目をきれいに合わせていくかが職人の腕の見せどころです。とは言っても工芸家とは違うから、いくら素晴らしい箱を作っても名前が表に出ることもないし、私たちの仕事はあくまで商品の引き立て役に過ぎません。でも贈られた人が喜んでくれる顔を想像すると嬉しくてね。どうしても手を抜けないんです。(談)

四 麦わら帽子・麦わら製品

吉村 幸蔵さん

春日部帽子組合の吉村商店四代目。明治創業の老舗工房。現在はストローバッグ（麦わらバッグ）や小物を中心に製造している。

昔は春日部には麦わら製品をつくる工房が30軒以上あったけど、今は4軒ほどになってしまいましたね。うちも、もともとは麦わら帽子を製造していたんだけど、帽子は夏場しか売れないし、価格競争も激しくなりそうだというので、父が昭和29年にストローバックづくりを始めたんです。当時は「吉村が変わったことをやりはじめた」とさんざん言われたらしいけど、今もこの仕事を続けられていることを思うと、父には先見の明があったと言っていいのかもね。（談）

田中 優さん

田中帽子店六代目。百貨店の営業職を経験した後、家業を継ぐことに。目下の夢は東京オリンピックの開会式の制服として自社の帽子が採用されること。

去年8月に家業を継ぐことになったのですが、伝統を守りながらも時代にあった帽子や経営スタイルを提案していくことが、これからの自分の役目だと思っています。帽子づくりで一番難しいのは渦巻きの中心部分を縫っていく最初の工程です。スタートで気を抜くと美しい帽子が完成しないのと同様、自分にとっても今がまさに正念場。将来経営の道に進むことになったとしても、職人さんの苦労やものづくりの現場を知っておくことは決して無駄にはならないはずです。（談）

三 押絵羽子板

坂田 好之さん

春日部羽子板組合の匠一好羽子板のさか田一代目。20代まではメーカーに勤務していたが、ものづくりに興味があったのと奥様の実家が羽子板の木地職人だったことから昭和49年に羽子板づくりの道へ。

豪華な振り袖スタイルや、現代的な柄や色、表情など、伝統の中に新しい時代感覚を取り入れたのがうちの羽子板の特徴です。興味深いことに羽子板は時代を反映しているんですよ。バブルの頃は地味な黒い着物の羽子板が大売れしましたが、不景気になると暖色系の派手なものが売れ始めた。おそらく元気になりたいという思いが人々を明るい色へ向かわせたのでしょう。最近は格差社会が進みつつあるせいか、高級なものと安いものの二極化が進み、中間価格帯が売れなくなっています。いずれにせよ羽子板は「邪気をはね（羽根）のける」という縁起物。皆さんに幸せが訪れるように職人一同、願いを込めながらつくっています。（談）

かすかべ
特産品の魅力
再発見!